

## 2026年1月25日顕現後第3主日

旧約聖書 アモス書3章1－8節

使徒書 コリントの信徒への手紙一1章10－17節

福音書 マタイによる福音書4章12－23節

本日の聖書日課は古い聖書日課と同じ箇所です。旧約日課はアモス書です。本日はアモス書から学びます。預言者アモスは、他の預言者とは異なる特徴を持っています。それは1章1節に「**テコアの羊飼いの一人であるアモスの言葉**」とある通り、預言者アモスは、預言者の家系に生まれた人ではなく、また預言者集団に所属した人でもなく、素朴な羊飼いであったということです。クリスマスの時に学びますが、羊飼いはアモスの時代も、過酷ではありますが、素朴でのどかな仕事の一つです。アモスという人物について、羊飼いであったということ以上わかりませんが、自分の知識や見解を述べるのではなく、主なる神様が、幻を通して与えた言葉を語る、まさに預言の人であったのです。

アモスの活動した時代は、先の1章1節に明確に示されています。「**それは、ユダの王ウジヤの治世、ならびに、イスラエルの王ヨアシュの子ヤロブアムの治世に、イスラエルについて幻に見たものであり、あの地震の二年前のことであった**」。アモスの時代、すでにイスラエル王国は南北に分裂して二百年以上経過していました。南のユダ王国の王ウジヤの王位は、紀元前781から740年です。北のイスラエル王国の王ヤロブアム（2世）の王位は紀元前786から746年です。「**あの地震**」とありますが、それは紀元前760年にイスラエル周辺にかなりの規模の地震があったことが、『聖書』以外からも指摘されており、そのことであると思われます。それらから考えますと、アモスが活動した時代は、紀元前762年から750年ごろと考えられます。

アモスの活動したこの時期は、活動場所であるイスラエル王国にとって特徴的な時代です。それは、数十年後の722年にイスラエル王国はアッシャリア帝国によって滅ぼされる時代であったからです。預言者アモスがその破滅の光景を見たのか否かはわかりませんが、のちの時代の歴史が語る事柄は、預言者アモスが懸命に預言活動をしたにもかかわらず、イスラエルの人々は耳を傾けず、王国は滅亡したということです。

さて、王国の滅亡数十年前というと、イスラエル王国がそのような危機感の中で、緊張感をもって人々が過ごしていたかというとそうではありませんでした。むしろ逆で、ヤロブアム王（2世）が治めていた時代は、イスラエル周辺の国際情勢が比較的安定していて、王国自体は豊かになっていたようです。それはよいことのように思えるのですが、そうではありません。なぜかというと、その王国の豊かさは、豊かな層の人々だけに独占され、豊かな人々は、貧しい人たちを税などいろいろな形で虐げていたからです。アモス書2章には、イスラエルとユダの罪に対する主なる神様の裁きが記されていますが、南のユダ王国に対する批判は、主の教えを拒み、捷を守らず、偽りの神々に従ったから（2：4）と批判しているのに対して、北のイスラエル王国には、正しく貧しい人に対する榨取と虐げについて批判しています。預言者アモスは、社会正義の預言者

ともいわれますが、それはイスラエルに蔓延している豊かな人の傲慢さと、貧しい人に対する虐げという具体的な行動に対する強い批判があるからです。

さて、『聖書』の小見出しに、本日の箇所について「神の選び」とあります。その通りに、「地上のすべての氏族の中から私が選んだのはあなたがただけだ」

(3:2) は、いわゆるイスラエル・ユダヤの選民思想の根拠の一つといえます。しかし、それは特権ではなく優遇措置でもなく、主なる神様の意思を具体化するための選びです。それゆえにそうでない場合どうなるか、それがその節の後半、「それゆえ、私はそのすべての罪のゆえにあなたがたを罰する」ということです。それは、主なる神様の罰が怖いからその通りに行動するという面もありますが、主なる神様の求めている事柄は、主なる神様の意思をしっかりと理解して、自分から率先してその意思の通りにイスラエルが歩むことです。だからこそ、主なる神様とイスラエルの関係は、人間の親子関係のようにたとえられるのです。もちろん、何もなしにそうしなさいということではありません。そのための道標として確固とした律法があり、時に応じた道標として預言があるのです。そのことを受けて、3節から8節に、主なる神様がなぜかたるのかということが、いろいろな動物、状況をたとえにして語られています。そして、最後が、「獅子がほえる、誰が恐れずにいられよう。主なる神が語られる、誰が預言せずにいられよう」(アモス3:8) と締めくくられています。

預言者アモスが活動した時代のイスラエル王国やユダ王国において、律法や戒めが、どれほど道標として機能していたかは分かりません。イエス様の時代と異なり、律法や捷よりも預言活動の方が盛んであったとも考えられます。逆に、イエス様の時代は、イザヤやエレミヤのように大預言者と呼ばれる人が活動する時代ではありませんが、預言活動が全くなかつたわけではありません。確かなことは、アモスの時代とイエス様の時代、その時の間は約700年ありますが、主なる神様は、律法と戒め、預言者を通して、イスラエルの人々に呼び掛けていたということです。そして、そのように呼びかけられるイスラエルであるからこそ、その歩みは、他の民族とは異なるものでなければならないということです。

本日の6節にある「町で角笛が吹き鳴らされたら、人々はおののかないだろうか。町に災いが起こったらそれは主がなされたことではないか」、この表現は、どのような災いであっても主なる神様に関係していると示しています。この言葉が示す事柄は、災害が単なる主なる神様による何かの罰ということではないと思います。たとえそれが起きたとしても、主なる神様を信じるイスラエルの歩みは、主なる神様を信じるがゆえに他の集団とは異なるのではないかということです。災害時、豊かな人のみが安定し、貧しい人たちが苦しむ、そのようなことになってはならないということでしょう。現実はそうではない、だからこそ預言者アモスは批判したのです。

わたしたちが信じているのは、アモス以上の預言者、預言者以上の方です。そのご生涯を持って、預言者の語る言葉以上の主なる神様の意思を、その中でも最も大切な愛を示された方です。その愛に基づいてわたしたちも歩み、またその愛を示していきたいと思います。